

ある単親里親の家庭再構成についての研究

－ 対話的調査を通して －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
村田 千津子

現在の社会的養護を担う体制は、戦後の孤児対策以来その時代の社会的状況を反映したかたちで構築されてきた。しかし、経済的理由とした家庭崩壊や育児の標準化による親の不安感、負担感の増大等により要保護児童の増加、児童虐待や子どもが犠牲となる犯罪等子どもの抱える背景が多様化している。

わが国における要保護児童の社会的養護は、児童養護施設や乳児院に代表される施設養護と、里親による家庭的養護に大別され、約9対1で長期に亘り施設養護中心で成されてきた。しかし、被虐待児への個別的ケアによる特定の大人との愛着形成が重要とされ、家庭的環境の下で養育する里親制度が注目されだした。先行研究においては、里親制度の重要性や課題については解明されているが、家族の個人化が進んでいる近年、単親里親の実態を明らかにした研究が少ない。

本研究は、里親制度拡充の基礎である里親数増加の推進において、これまで議論されなかった単親里親（未婚、離婚、死別のシングルの形態で養育里親の認定を受けた者）の要保護児童委託の可能性を見出し、里親制度の新たな発展を考察したものである。

研究方法は、夫の死後、三人の実子がいる上で養育里親として社会的養護に参加した、ある単親里親のライフストーリー・インタビューを用い、インタビューというフィールドワークから生まれたエスノグラフィとして捉え、生きられた経験を伝えることとした。また、予備的調査として、児童相談所への聞き取り調査とファミリーホーム型里親家庭での参与観察を行なった。

結果として、里親と里子のケアの相互作用、里子を介した家族の再構成、里親・里子の肯定的変化が視られ、今後の里親制度における単親里親の可能性が明らかになった。同時に、その背景には里親支援機関の体制を早急に整える必然性が明確になった。

社会的養護の実質的機関である児童相談所においては、自治体間格差が生じており、今後、里親制度が発展するためには「家族・家庭」像への新しい視点が必要とされる。

里親制度は要保護児童のニーズが先にあり、そのニーズに応えるための制度であることから、既成の里親像にとらわれず、養育能力・技術・意欲のある者を受け入れ育てていくことが里親制度の成熟へと繋がることが明らかになった。

本研究の今後の課題は、他の単親里親との接点を持ち、「里親制度におけるケアの相互作用」「里親という行為を介した自己実現の確立」の研究を深め、単親里親が「家庭」という視点からの選択肢に加わることの必要性を普及させることとする。